

「ラテン語日常会話の師」、 プラウトゥスとテレンティウス

—ポール＝ロワイヤルの「小さい学校」におけるラテン語教育の中で—

Plaute et Térence, « Maîtres de la langue latine pour la conversation »,
Dans l'éducation latine aux Petites Écoles de Port-Royal

榎本恵子

序論

ヨーロッパ喜劇の起源として、古典ラテン喜劇作家、プラウトゥス Titus Maccius Plautus（紀元前 254- 紀元前 184）とテレンティウス Publius Terentius Afer（紀元前 195 あるいは 185 頃 - 紀元前 159）は「喜劇の父」と称されていた。劇作家としての彼らの精神は、フランス喜劇の中に宿っていることを見ることができる¹。しかし同時にプラウトゥスの生き生きとした表現と、テレンティウスの優雅な文体の美しさは日常会話としての「生きたラテン語の師」としてキケロ、ウエルギリウスに続く手本と位置付けられていた。

本来演劇とは上演されるために作劇され、人々を魅了するものであるが、本稿では、「喜劇の父」ではないプラウトゥスとテレンティウスの日常会話としての「ラテン語の師」としての位置づけを確認するために、演劇反対の立場で知られるポール＝ロワイヤルの「小さな学校」におけるラテン語教育を検証していく。

ポール＝ロワイヤルでは、サシ師 le Maître de Sacy（1613-1684）がテレンティウスを、クロード・ニコル Claude Nicole（1611-1685）、トマ・ギヨ Thomas Guyot がそれぞれプラウトゥスの作品のフランス語訳を付した対訳版を作っている。またピエール・ニコル Pierre Nicole（1625-1695）はランスロ Claude Lancelot（1615-1695）

¹ フランスおよびヨーロッパにおける喜劇は、プラウトゥスとテレンティウスをもとに誕生したと言われている。モリエールは彼らの後継者として「17世紀のプラウトゥスとテレンティウス」と称賛され、ついには彼らを凌ぐ「フランス喜劇」の礎となった。Voir 拙論 « Molière, successeur de Plaute et Térence », [in] *Études de Langue et Littérature Françaises*, 第 102 号、2013、pp. 19-34.

と共にラテン語版、トマ・ギヨが対訳版の『風刺詩選集』を編纂するが、その中にプラウトゥスとテレンティウスの作品から数多く選ばれている。

我々はまず、ポール＝ロワイヤルが演劇をどのように認識していたのかを提示し、ラテン語とフランス語対訳を扱っていた「小さな学校」におけるラテン語教育がどのようなものであったのか詳らかにする。そして古典ラテン喜劇の台詞の格言的な役割と『風刺詩選集』を検討することで、プラウトゥスとテレンティウスの「ラテン語の師」としての評価の裏付けをしていきたい。

I. ポール＝ロワイヤルと演劇

1. 演劇の役割

脚本、役者を中心に、台詞、歌、演技の他に衣装、舞台装置などが組み合わせられ、多くの人を魅了してきた演劇にはアラン・ヴィアラが提唱するように三つの側面がある。公共のスペクタクルとしての演劇、社会的事象としての演劇、そしてテキストとしての演劇である。

現代において公共のスペクタクルのジャンルにはスポーツ、サーカス、パレードなどが入るが、演劇も、人々が集い見物する場で、幻想、あるいはフィクションを観客に提供するスペクタクルの一つである²。フィクションとはいえ、観客の共感を得るため、現実に基づき、信憑性を持たせ、様々な技巧を凝らして観客の興味を引き付ける。「リズム、歌、滑舌、己が内に秘めた情熱を自然に本能的に表すイントネーションや顔の動きや所作、詩人や演劇人を突き動かす活き活きとした情熱の伝播が、観る者と演じる者に、心を揺さぶるような奥深いところでの共鳴を促進し、広がっていく³」演劇の力は、すなわち社会的事象としての役割を持つ。その人々を魅了し引き込む力が宗教的、政治的儀礼のひとつとして使われることも多い。ヴィアラも「ほぼすべての社会、文化、時代がその重要性を認めたといっても過言ではない⁴」と言っている。演劇の持つメッセージ性、洗脳性が、17世紀イエズス会のコレージュにおいては、未来の聖職者や説教師に不可欠なレトリックを学ぶ格好の活動として、

² Alain Viala, *Histoire du théâtre*, PUF, coll. *Que sais-je ?*, 2005, rééd. 2014, p. 9. アラン・ヴィアラ『演劇の歴史』高橋信良訳、白水社、文庫クセジュ、(2008) 2010, pp. 9-14.

³ F. Charmot, *La Pédagogie des Jésuites : Ses principes – Son actualité*, Paris, Editions Spes, 1943, p. 2.

⁴ Alain Viala, *op. cit.*, p. 9. アラン・ヴィアラ、前掲書、p. 14.

学校教育の中で重要視されていたのだ。聴衆を説得するレトリックの技術が、まず演じる者の魂を高揚させ、観る者の心を揺さぶり、信仰心を高めようという信仰教育も兼ねていたことはよく知られている⁵。また演劇の力の一つの例として演者が、演じた役の中に入り込み回心するという芝居もある⁶。政治的パフォーマンスで言えば、ルイ 14 世が、絶対君主制を確立していく段階で自ら芝居の中で太陽神を扮して踊り、その周りを貴族たちに太陽を中心に回る惑星のように参加して踊らせることでその力を誇示したことは有名である。また革命期に古代のテーマが好まれ新しい意味を付与されて演じられたり、革命の様々な段階が演劇によって上演されたことも、それを表明している。そして、この演劇が観客に与える影響力こそが、ポール＝ロワイヤルの隠士たちが、「小さな学校」において演劇を一切禁止した理由の一つであると言える。

そして、テキストに焦点が当たった時、芝居はライブ・パフォーマンスの他に、文学的要素を持つ。演劇が詩の一部と認識されていた時代もあるし、朗読されたこともある⁷。「文学」として学ぶ対象になり、「読書」としての楽しみを提供する。テンポのいいセリフ回し、心を動かす抒情的な台詞は読む者の心に記憶されることとなり、我々の口を突いて出てくるのである。

2. ポール＝ロワイヤルの演劇評価

パスカルが、演劇は「情念をきわめて自然かつ繊細に表現⁸」し、無垢な子供たちの心を穢すと考えていたように、ポール＝ロワイヤルでは、演劇は「異教徒たちによる風紀を乱す最たるもの⁹」という認識が蔓延していた。

⁵ 演劇のもたらす効果については、B. Filippi, « Le théâtre des vertus : la pratique scénique jésuite entre pédagogie et religion », 拙訳『「徳」の演劇 教育と宗教の交差としてのイエズス会学校演劇』、17 世紀フランス演劇学会 『エイコス』第 17 号、2012、p. 45 参照。

⁶ Voir Jean Rotrou, *Saint Genest, comédien païen, représentant le martyr d'Adrien*, Paris, chez Toussaint Quinet, 1647.

⁷ Voir Thomas Sébillet, *L'Art Poétique François* (1548) [in] *Traité de poétique et de rhétorique de la Renaissance*, éd. par François Goyet, Paris, Le livre de poche classique, 1990 ; Peletier du Mans, *Art poétique*, 1545, Paris, M. Vascosan.

⁸ B. Pascal, *Pensées*, Lafuma 764, Sellier 630.

⁹ 聖アウグスティヌスの『神の国』の中ですでに示されている考え方で、ロングヴィル公爵夫人の霊的指導者アントワーズ・サングランは演劇を「具現化した悪魔の傑作」とみなし、フィリップ・ゴワボ＝デュボワも聖アウグスティヌスに倣って「悪魔に魅入られたもの」とし、演劇が道徳を貶めるものと考えていた。Voir Antoine Singlin, « Lettre à la duchesse de Longueville », 1661, [in] *Traité de la Comédie de Pierre Nicole*, éd. L. Thirouin, Champion, 1998,

ニコルは『演劇論』*Traité de la Comédie* (1667)の中で、演劇は退廃的な因子を持っていると批判する。芝居の内容以前にまず役者の私生活を指摘する。職業上、墮落しやすい誘惑に囲まれているからだ。たとえ演劇の目的がそうでないとしても、よいこと悪いこと双方が舞台上に展開されるのであって、これは役者にも観客にも善悪双方の影響を与える。その上たとえ登場人物の想いが本物だとしても、ひとたび舞台に載れば疑似恋愛となる。疑似的な情熱は役者や観客のプライベートにも安易な恋愛を許しかねない。ニコルは、人の心は快樂に弱いものだからと説明する¹⁰。純粹無垢な青少年が「登場人物の世界に身体も魂も奪われて、観る者の高揚した奥深い感情まですべて吸収¹¹」されてしまうことを危惧し、ポール＝ロワイヤルの「小さな学校」では、演劇活動の習慣はなかったのである。そして芝居を見に行くことも好ましくないとされていた。

演劇を禁止しているにもかかわらず、ポール＝ロワイヤルの隠士たちは「小さな学校」で学ぶ青少年のためにプラウトゥスとテレンティウスの作品を翻訳した。1647年サシ師による翻訳されたテレンティウスの三作品『アンドロスの女』*l'Andrienne*、『兄弟』*les Adelphe*s、『ボルミオ』*le Phormion*と、1656年のクロード・ニコルによる『幽霊屋敷』*Le Phantosme*、1666年のトマ・ギヨによる『捕虜』*La Nouvelle traduction des Captifs*である。当然のことながら、この矛盾はラシーヌ Racine (1639-1699)によって「隠士たちは反演劇を声高々に叫ぶが、彼らはテレンティウスを訳し、それを授業で扱っている」とポール＝ロワイヤルの立場に反駁した手紙を書き¹²、論争となった。しかし、発端となったデマレ・ド・サン＝ソルラン Desmarest de Saint-Sorlin (1595-1676)の『妄想に囚われた人々』*Les Visionnaires*をめぐる、ニコルが『想像上の異端についての書簡』*Lettres imaginaires*の中で演劇を批判し、演劇の倫理性を問いただした時、彼が問題にしたのは、実は演劇全体というよりは悲劇に限定されていた¹³。また、ポール＝ロワイヤルは、観る者の五

p. 127 ; Nicolas Fontaine *Mémoires ou histoire des Solitaires de Port-Royal*, édition critique par P. Thouvenin, Honoré Champion, 2001, pp. 154 et 748 ; Philippe Goibaud du Bois, « Réponse à l'auteur de la lettre contre les *Hérésies imaginaires* et les *Visionnaires* », 1666, [in] *Traité de la Comédie* de Pierre Nicole, éd. cit., p. 245.

¹⁰ Voir Pierre Nicole, *Traité de la Comédie*, éd. cit., VIII, p. 48.

¹¹ B. Pascal, *Pensées*, Lafuma 764, Sellier 630.

¹² Racine, 10 mai 1666, [in] Pierre Nicole, *Traité de la Comédie*, éd. cit., p. 271.

¹³ ラシーヌとポール＝ロワイヤルの一連の論争は1664年から1668年まで続いた。Voir 拙論、*Plaute et Térence en France aux XVI^e et XVII^e siècles*, Thèse sous la direction de G. Forestier, Université de Paris-Sorbonne, 2011, p. 160-164 ; L. Thirouin, « La querelle de Racine et de Port-

感に働き、情念を呼び起こす舞台上げられるスペクタクル（ライブ・パフォーマンス）としての戯曲と、言語習得目的の読み物（テキスト）としての戯曲を区別していた。その上で、テレンティウスの喜劇の文体の美しさ、教訓的台詞は、ラテン語の学習になくてはならないと認識されていたのである¹⁴。

II. ラテン語教育とプラウトゥスとテレンティウス

ポール＝ロワイヤルの「小さな学校」では、いったいどのような教育理念のもとに、教育がなされていたのか。プラウトゥスとテレンティウスの作品の翻訳を許した「小さな学校」における教育理念とラテン語教育について検討していく。

1. ポール＝ロワイヤルの「小さな学校」

「小さな学校」の教育理念は、1620年、メール・アンジェリックとの出会い以降、霊的指導者となったサン・シラン Saint-Cyran (1581-1643) によって書かれた。サン・シランをはじめ、彼の二人の小さな甥、ピニオン氏の二人の息子の教育を担当していた。

彼によれば、人間は罪の存在で、純粹さというものはひどく脆い。人間は救いを神の恩寵によってしか得られないのであり、それは「(...) あらゆる徳を持っておられる唯一神のみがすべての現象を導く」ことができ、その救済は「神のご意思にゆだねられている」¹⁵。そこで、「青少年の純粹さを維持すること」の重要性を強く感じたサン・シランは、以下の手紙に見られるように次第に子供たちの教育のこと

Royal », [in] *Traité de la Comédie* de Pierre Nicole, éd. cit., p. 217-277 et *L'Aveuglement salutaire*, Paris, Champion, 1997, p. 45-81 ; Pierre Force, *Molière ou Le prix des choses : morale, économie et comédie*, Paris, Nathan, 1994 ; rééd. 1998, p. 232.

¹⁴ 舞台上げられるスペクタクルとしての戯曲 (Comédie spectaculaire) と、言語習得目的の読み物としての戯曲 (Comédie livresque) の二つの識別は博士論文にてその用語を初出した。拙論 *Plaute et Térence en France aux XVI^e et XVII^e siècles*, op. cit., p. 160-164 ; ポール＝ロワイヤルの考えについては、拙論 (前掲書)、p. 136-165 および以下を参照 : L. Thirouin, « La querelle de Racine et de Port-Royal », [in] *Traité de la Comédie* de Pierre Nicole, éd. cit., p. 217-277 et *L'Aveuglement salutaire*, éd. cit., 1997, p. 45-81.

¹⁵ I. Carré, *Les Pédagogues de Port-Royal, Saint-Cyran, de Saci, Lancelot, Guyot, Coustel, Le Maître, Nicole, Arnauld, etc. Jacqueline Pascal : Histoire des Petites Écoles*, notices, extraits et analyses avec des notes, Paris, Librairie Ch. Delagrave, 1887, rééd. Genève, Slatkine Reprints, 1971, p. xvi.

を真剣に考えるようになった。

私は教会のセミナリオのような家を建てようと考えている。そこで子供たちは純粹な心を保つことができるだろう。そうでなければ、日々、彼らが良い司教になるのは難しいと思うのだ。¹⁶

「小さな学校」は「世間から隔離し、修道院の外で子供たちを教育し、養成する場¹⁷」で、主に、ポール＝ロワイヤルの隠士の知り合いのブルジョワ階級または貴族の子息を預かっていた。

子供たちの純粹さを守る、洗礼によって祝福された彼らに内在するイエズス・キリストを守ること。その純粹さを穢れから護ること。つまり、罪深い本能が負けたあらゆる悪から護り、悪魔の誘惑、人間の幸福を上辺の幸福を興奮させるような感情から護ること、周到に練られた奸計、つい流されてしまいそうな誘惑から護ることである。¹⁸

I. カレは、サン・シランの教育の原則を上記のようにまとめたが、ポール＝ロワイヤルの教育理論のすべては、この原則の中に集約され、それに追隨するものである。「神が彼らに託した預かりものであり、悪魔に魅入られている獲物である子供たちをみる¹⁹」教師たちの意識は、ややもすれば行き過ぎなところもあったが、しかるべく教育するように、細心の注意を払った。そして、彼らの教育理念に適應させた教授法を作り、子供たちの純粹さが異端の考えによって罪深くなることを避けるために心を砕いた。

2. ラテン語とラテン文学

神の恩寵を受ける資格を持つべく誠実な人間になるためには、善と悪をよく知らなければならない。そのために子供たちは多くの教科を学ばなくてはならない。まず最初に学ばなければならないのは、母国語であるフランス語である。この考えは、

¹⁶ Sainte-Beuve, *Port-Royal*, Paris, R. Laffont, coll. Bouquins, 2004, tome I, liv. 4, p. 796.

¹⁷ F. Delforge, *Les Petites Écoles de Port-Royal, 1637-1660*, Paris, Cerf, 1985, pp. 157-158.

¹⁸ I. Carré, *op. cit.*, p. xvi.

¹⁹ *Ibid.*, p. xviii-xix.

モンテーニュの『エッセー』によってよく知られるとおり、ラテン語がフランス語より前に学ぶべき言語であった時代において画期的なことであった。「ラテン語で読むことはフランス語で読むことの基礎」だったからである。「ラテン語にはフランス語と同じアルファベットと音節が含まれている」ため子供たちが混乱しないように「フランス語で読むことを学ぶ前に、まずあらゆる本をラテン語で読むことを学ばねばならない」と考えられていたのである²⁰。

しかしこの方法では子供たちが「ラテン語をフランス語で話す」ようになってしまおうとしてポール＝ロワイヤルはこの教育法を否定した。また、もし「ラテン語やギリシャ語を10～12歳で学ぶとしたら、フランス語を学ぶのは30歳を超えてしまう」²¹が、それでは、「母国語の前にラテン語を学ぶことは歩くより先に馬に乗ることを学ぶ²²」ようなものである。ポール＝ロワイヤルの隠士たちは、子供たちにはまず母国語をしっかりと学んでほしいと考えた。読み書きがしっかりできることで、「自分がしなければならないことを知る」ことができる。文学を学ぶことで、善悪の判断をする方法を学び、自分の意見を立論し、表現できるようになる。そしてそれは、「信仰の真実を擁護しながら神に仕えること」へと向かうものであると考えたのである²³。ニコルは学習の段階を次のように表している。

ラテン語の知識が子供たちに定着していく最大の秘訣は、多くの場合、読書を通してである。そしてフランス語に訳す練習を数こなしていく中にある。けれども、この学習は同時に子供たちの心の在り方、判断力、道徳心を養成することになるので、いくつかの規則をしっかり守る必要がある。²⁴

サシ師と、ニコルやランスロたち同僚は学校で使う教科書の編纂に力を入れた彼らの独自の教授法は、フランス語の学習法が独特であることも周知のことであるが、ラテン語の文法書がフランス語で書かれたこともまた革命的なことであった。

²⁰ Jacques de Bathencourt, *L'École paroissiale*, cité par F. Delforge, *op. cit.*, p. 288.

²¹ Le Maître de Sacy, *Au Lecteur des Comédies de Térence*, Paris, Vve de M. Durand, 1647.

²² Il s'agit d'une phrase de Comenius, qui a écrit à peu près la même époque. Cité par F. Delforge, *op. cit.*, p. 289.

²³ I. Carré, *op. cit.*, p. xxi.

²⁴ Pierre Nicole, *De l'éducation d'un prince, divisée en trois Parties, dont la dernière contient divers Traitez utiles à tout le monde*, A Paris, Chez la veuve Charles Savreux, Libraire Juré, au pied de la Tour de Nostre-Dame, 1670, pp. 56-57 ; F. Delforge, *op. cit.*, p. 292.

クロード・ランスロは『ラテン語を簡単に短期間で学習するための新メトード』*Nouvelle Méthode pour apprendre facilement et en peu de temps la langue latine* (1644)で、「多くの問題点を明るみに出し、とりわけ初心者のために」、既習の言語で、つまりフランス語で文法を説明する方法をとったのである²⁵。ランスロによると、「より簡単なものから始める」のがいい。そこで生徒たちの心を不安にさせないように気を配り、『新メトード』は、より明確に、より早く、より楽しく理解し学ぶことができるよう意識して構成された。自身の教育の経験から青少年が外国語を学ぶことはとても難しいことであることを理解したうえで、教師たちはラテン語の文法をフランス語で書き、ラテン語の古典作品を常に、フランス語訳との対訳で作ったのである。ランスロが作ったラテン語の文法書はまだ若かりし国王の教育にも使われた²⁶。時代の傾向は次第に、フランス語をまず第一に考えるポール＝ロワイヤルの方法に近づいてきた。ルイ 14 世の世紀の特徴である「ラテン語をフランス語で話すことをやめること²⁷」の先駆的役割を担っていたといえる。

ラテン語の講読とラテン作家の説明も、教師たちは生徒たちのためにフランス語訳付きのテキストを作った。サシ師は「フランス人を養成する」ことに心を砕いた。つまり、小さい子供が、翻訳のないラテン語の作品を読んでラテン語を学び、母国語であるフランス語がおろそかになり、フランスにいるフランス人でありながら、フランス語が「外国語」となってしまうことを憂いたのである。そしてラテン語とフランス語の対訳版という形をとることでラテン文学を学ばせるとともに「きちんとした」ラテン語と、「美しい」フランス語の表現を習得する環境を整えたのである。そしてサシ師はバエドロスの『寓話』*Phèdre* の版の序文で彼の翻訳に関する見解を明らかにしている。

最初は我々にとって外国語であったはずの作品の書かれた内容に早く入っていき、自然に内容を理解していく最良の方法は、ラテン語で書かれた文の隣にフランス語訳があることだ。そうすることでラテン語とフランス語の関連性、ラテン語とフランス語の表現、ラテン語とフランス語の文飾を苦勞せずに学ぶこ

²⁵ F. Delforge, *op. cit.*, p. 296.

²⁶ La *Nouvelle Méthode latine* de Lancelot a un succès énorme et sert à l'instruction du jeune Louis XIV. Voir la préface de l'édition de 1655 de la *Nouvelle Méthode latine* ; voir aussi F. Delforge, *op. cit.*, p. 299.

²⁷ Sainte-Beuve, *Port-Royal*, *op. cit.*, pp. 820-821.

とができるからである。さらにラテン語、フランス語双方の堅固な知識を習得し、ラテン語からフランス語、フランス語からラテン語の両方向に訳すことを同時に学ぶことができる。²⁸

そのための翻訳の方法として気を付けていたことがアントワヌ・ル・メートルの規則に見られる。

フランス語に訳す中でいちばんに気を付けなければならないのは、原文に忠実に、つまりラテン語で書かれているすべてをフランス語で表現し、フランス語の文としてよいものを目指す、例えるなら、キケロがフランス語を話すとしたら、そう話すだろうフランス語に訳すことである。²⁹

サシ師は逐語訳をしない。ラテン語に精通している人には読みにくいかもしれないことは承知していたうえでの彼の選択である³⁰。ラテン語の表現が常にフランス語の表現として在るとは限らない。逐語訳はそんな時「読みにくい、滑稽な文」になってしまうからである³¹。対訳版を使うことは死語であるラテン語と日々使う言語であるフランス語の違いをより明確に示すこととなった。そして当時の慣習に反して、ラテン語からフランス語への翻訳練習を、筆記と口頭いずれの場合においても、ラテン語訳より優先させる学習を可能にした。

子供たちはラテン語からフランス語に訳す練習をよくしなければならない。というのもこの練習は言葉を慎重に選んで話し、またラテン作家の言わんとしていることを汲み取れるようになるために課せられているもので、自らの精神と判断力を鍛えると同時に、ラテン語の美しさだけでなく、フランス語の美しさを学ぶことになるからである。³²

²⁸ « au lecteur », *Les Fables de Phèdre*, édition de Sacy, Paris, Vve M. Durand, 1647.

²⁹ Antoine le Maître, *les Règles de traduction*, Règle I, cité par F. Delforge, *op. cit.*, p. 301.

³⁰ *Ibid.*

³¹ *Ibid.*

³² P. Coustel, *les Règles de l'éducation des enfants*, 1, III, chap. V, moyen X (t. II, p. 185), cité par F. Delforge, *op. cit.*, p. 300.

サシ師は読者への「読み方」を付け、準備した本が様々な段階の学習に有用できるように指示した。小さい子供たちには美しいフランス語を身に着けることを、より上のレベルの生徒にはラテン語の学習と、哲学書としての学習ができるようになっている³³。テキストをよりよく理解するためだけでなく、ラテン語とフランス語の習得を目指す方法が提示されている。教師はラテン語のテキストを説明し、フランス語の訳を何度も読ませ、必要とあらばフランス語のテキストを暗記させる。この方法は教師が、ラテン語よりも先に母国語を習得させることが重要であると判断してのことをよく示している³⁴。

トマ・ギヨも同じく自身の教育論を展開した。対訳版のテキストを読むとき、声を出して読むことは重要である。なぜなら、それは「古典語」であり今となっては「死語」であるラテン語の確かな知識を学ぶことになるからである。そして「古典ラテン作家の作品を実際に読むことによって（文学と文化の知識を）深める³⁵」ことになる。翻訳をする中で、トマ・ギヨは「正確に字面をおう」ことを求めるのではなく、アントワヌ・ル・メートルの規則に倣い、「もし彼らがフランス語を話すとしたら話すであろう」フランス語に訳せるようにすることを求めた³⁶。

生徒がラテン語からフランス語に訳すときは、「訳している対象の作家が何を言いたいのかをよく理解したうえで、もし彼らがフランス語で書いたならそうするであろう」フランス語にしなければならない³⁷。フランス語のラテン語訳もまた、同じ原則の上に成り立っている。つまり「ラテン語を話す人が口にしないようなラテン語にする不都合³⁸」を避けなければならないということである。

「小さな学校」では、授業で学んだ作家の作品を読めるように古典作家の抜粋を準備したが、生徒たちが作品全体を読むことを禁止していたわけではない。青少年の心の成長のため、教師たちは、「彼らの時代の道徳に合わないもの」に子供たち

³³ クロード・ランスロは、ギリシア語のメソッドについても書いている。Voir Claude Lancelot a rédigé également la méthode d'apprentissage de la langue grecque : *Abrégé de la Nouvelle methode pour apprendre facilement & en peu de temps la langue grecque*, Paris, Antoine Vitry, 1655.

³⁴ サシ師の教育法とその目的については以下を参照 : Voir la préface de Sacy aux *Fables de Phèdre et aux comédies de Térence* qui retrace à la fois la règle et le but de cette éducation.

³⁵ F. Delforge, *op. cit.*, p. 300.

³⁶ Voir aussi l'avis au lecteur des *Lettres Morales et politiques de Cicéron a son amy Attique, sur le Party qu'il devait prendre entre Cesar et Pompée*, Paris, Chez Claude Thiboust, Libraire, 1666. Voir aussi F. Delforge, *op. cit.*, p. 300.

³⁷ I. Carré, *Les Pédagogues de Port-Royal*, p. xxvi.

³⁸ *Ibid.*, p. xxvi.

が触れないように、古典作家の抜粋を準備したり、不穏当箇所を削除した版を準備したのである。その一環で、プラウトゥスとテレンティウスも翻訳されたのであろう。1658年、1659年にはミシェル・ド・マロール Michel de Marolles (1600-1681) がプラウトゥス全集³⁹とテレンティウス全集⁴⁰の対訳を出しているから、あるいはそれらもポール＝ロワイヤル版と共に「小さな学校」の生徒たちが読む機会があったとも考えられる。

3. サシ師訳『テレンティウス喜劇』

パエドロスの『寓話』を訳した翌1647年、「小さな学校」での使用を目的として、サシ師はテレンティウスの対訳本『テレンティウス喜劇』を作った。彼はテレンティウス6作品のうち三作品『アンドロスの女』、『兄弟』、『ボルミオ』をサン・トーバンのペンネームを用いて翻訳した *Comédies de Térence. [l'Andrienne, les Adelphe, le Phormion], traduites en français avec le latin à côté [et avec des notes] et rendues très honnestes en y changeant fort peu de chose pour servir à bien entendre la langue latine et à bien traduire en français.*

サシ師はテレンティウスの作品を「登場人物の性格描写、シチュエーションの描写、登場人物の感情、表現の純粹さと上品さ⁴¹」を評価していた。彼によると、パエドロスのいくつかの場面はテレンティウスの作品を上回る高貴な文体であるが、テレンティウスの文体は会話において学ぶべき美しさがある。より日常会話に近いものであるにもかかわらず、決して卑猥なレベルにまで墮ちることなく、喜劇全体も、多少いかがわしいところを17世紀の道徳に合うように調整すれば、学校で使うテキストとして最良のものであると思っていたのだ。そこでサシ師は「教養ある人がテレンティウスの作品を勉強しやすいように、とりわけ、古典演劇に初めて触れる『小さな学校』の生徒たちも勉強できる⁴²」ように心を砕いた。

ラテン語の原文は、青少年の成長や、モラルに悪影響を与えないように、好ましくない場面や、表現を修正し、必要とあらば削除、筋を変えないように加筆も厭わ

³⁹ *Les Six comédies de Térence, en latin et en français, de la traduction de M. de Marolles, abbé de Villeloin, avec des remarques...*, Paris, Lamy, 1659.

⁴⁰ *Le premier (- quatrième) tome des Comédies de Plaute, avec des remarques.* En latin et en français, Paris, 1658.

⁴¹ G. Delassault, *Le Maître de Sacy et son temps*, Paris, Nizet, 1957, p. 31.

⁴² *Ibid.*, p. 31.

なかった。商売女は姿を消し、不幸な若い女性となった。男性中心の性的暴力の多くは、純愛に変わった。エピソードを付加するときは、他のテレンティウスやプラウトゥスから借用し、また言葉や表現を含めた戯曲全体の調和にも気を配った⁴³。17世紀の演劇に課せられていた真実らしさ、礼節などの規則にも気を遣ったのである⁴⁴。

テレンティウスの『ポルミオ』に出てくるクレメースはアテナイの妻子の他にレムノスにも妻子があり、その娘と弟の息子アンティフォを娶らせようと考えていた。そしてアテナイにいる息子ファエドリアは商売女を愛人にしていて、サシ師は青少年の眼に触れさせるのは好ましくないとして、レムノスにいる妻子を秘密婚の間柄とし、クレメースはその娘を認知することで弟の息子との結婚を祝福する。また、息子が入れあげている商売女は、実はある裕福な紳士の娘だったという認知の場面を付加し、二組の認知と結婚というハッピーエンドの常套手段で収めた。『兄弟』でも、冒頭から息子アエスキヌスが娘を強姦して妊娠させたというショッキングな話が出てくるが、強姦は秘密婚に、その際に落とされたとされるアエスキヌスの指輪は結婚指輪となり大団円の結婚への伏線とするなど変更した。

1659年にテレンティウスの喜劇を全訳したミシェル・マロールは、このサシ師の翻訳を絶賛しており、それだけに加筆修正をしたのは残念だと言及している⁴⁵。サシ師の努力が、青少年の教育—フランス語教育に大いに役立っていたであろうことを物語っている。そしてサシ師の訳は17世紀の間だけでも10回は再版され、マルティニャック氏 *Sieur de Martignac* が1670年、サシ師訳に残りの三作『宦官』*l'Eunuque*、『自虐者』*le Fâcheux à soy-même*、『義母』*l'Hécyre*の訳を付け加えた『テレンティウス喜劇全集』*Comédies de Térence*を出している。

4. クロード・ニコル『幽霊屋敷』1656年

プラウトゥスの作品は全集の訳ではなく、まずクロード・ニコルによって1656年『幽霊屋敷』が訳された。ニコルは『幽霊屋敷』を訳したのは1656-1657年のシーズンにオテル・ド・ブルゴーニュ座で上演され成功したキノー *Quinault* (1635-1688)

⁴³ Voir Le Maître de Sacy, *Au Lecteur des Comédies de Térence*, éd. cit.; Alexandre Eckhardt, « Le Térence Janséniste de Molière » [in] *Revue bimensuelle des cours et conférences*, Poitiers, Société française d'imprimerie; Paris, Boivin et Cie, éditeurs, 1929, pp. 277-288.

⁴⁴ G. Delassault, *op. cit.*, pp. 31-32.

⁴⁵ Extrait de la *Préface* de Marolles aux comédies de Plaute.

の『恋する幽霊』*Le Fantôme amoureux* を観たことに触発されたからのようだ⁴⁶。しかし直接の理由はプラウトゥスの作品の中で最も良い終わり方をしているからだとしている。ニコルはこの、喜劇にしては結婚によるハッピーエンドではない珍しい作品を翻訳するにあたって、オリジナルを削ったり膨らませたり、かなり自由に翻訳したと断り、その良し悪しは読者に委ねるとしている。幕や場の構成も変え、アレクサンドラン十二音綴にし、登場人物の名前もフランス化しているが、彼自身はこれをあくまでも翻訳としている。そしてこの作品はテレンティウスに劣らず、授業でも扱えるものであるとプラウトゥスを評価した⁴⁷。ただし、他のポール＝ロワイヤルの翻訳と異なり、対訳ではなくフランス語訳の形式をとっている。

5. トマ・ギヨ訳『捕虜』

プラウトゥスのフランス語訳二作目は、1666年のトマ・ギヨによる『新訳 捕虜』の対訳である。トマ・ギヨは同じ年、キケロの書簡2通とウェルギリウスの『牧歌』*Bucolique* を訳している。なぜ『捕虜』を訳したのかその理由は述べられていないが、「小さな学校」の教師としてプラウトゥスの文体が他のラテン作家と同様、学ぶべき価値のあるものと評価してのことであるのは確かである。そしてこれをフランス語、ラテン語の学習にあてることを前提としている。翻訳に先立って「読者へ」と題された30ページに渡る序文があるが、彼の言語学習についての見解が展開されている。

読者を短く端的にすべてを説明する一種の語りの役割を担えるよう養成しなければならない。頭で考えるより、存外難しい作業である。次に書簡体にすることを養成しなければならない。これはより日常的な文体で、論理的に話す会話に似た文体を学ぶことである。⁴⁸

プラウトゥスの作品は、彼の教育論を実践するための一例であることがわかる。そ

⁴⁶ Claude Nicole, *Au cher Amy Lecteur du Phantosme*, 1656. L'auteur des *Rivales* est Philippe Quinaut, la représentation de cette pièce intervient en 1653, elle sera publiée en 1655-56. *Le Fantôme amoureux* a été représenté en juillet 1656. キノーの作品はプラウトゥスの作品とはまるで異なる作品のため、タイトルがニコルにプラウトゥスの作品を想起させたと考えられるべきだろう。ニコルもキノーの作品とタイトルが似ているから間違えないようにとコメントしている。

⁴⁷ *Ibid.*

⁴⁸ Thomas Guyot, *L'Avis au Lecteur des Captifs*. éd. cit.

の上で、1647年のサシ師の翻訳を挙げ、プラウトゥスと比較するとテレンティウスのほうが優れているとする。どうしてもプラウトゥスの方が品が落ちてしまうのだが、それでも『捕虜』はプラウトゥスのうち最も青少年の精神的教育に悪影響を及ぼさないと考えられる作品であると説明する。この作品は、プラウトゥス自らがプロロゴスで「人様の前などでは言えないようなわいせつな文句も出てはまいりません。女をとりもつ嘘つきの男も出ないし、たちの悪い商売女も、ほら吹き軍人なんかありません⁴⁹」と言っているとおりであり、主従の友情とその絆が主題となっている作品である。ギヨは道徳の面においても、青少年がこれから先生きていくうえで知っておくべき教訓が多くちりばめられおり、是非これを無垢な子供たちのために準備したいと願ったのである⁵⁰。

Ⅲ. 二つの『風刺詩選集』

生徒たちは、教室で学んだ作家の作品の中から一冊読むことを推奨されていたが、ニコルは1670年の『王太子の教育について』*De l'éducation d'un prince*の中で、「評価できないもの」、たとえば「作品丸々すべてが〈完璧〉でない作品を丸ごと暗記させること」は良くないとも言っている。これはアントワヌ・アルノーが『人文学課程における学習規則の覚書』*Mémoire sur le règlement des études dans les lettres humaines*の中で「作品の中の選りすぐりの箇所を暗記したり、勉強したほうがいい⁵¹」と示していたことに合致している⁵²。

アントワヌ・アルノーの「古典作家の優れた箇所⁵³」を読むことできちんとし

⁴⁹ 『捕虜』プロロゴス、v.56-59。鈴木一郎訳、『古典ローマ喜劇全集』第1巻、p. 396。

⁵⁰ Thomas Guyot, *L'Avis au Lecteur des Captifs*, éd. cit.

⁵¹ Antoine Arnauld, *Mémoire sur le règlement des études dans les lettres humaines*, Nouvelle édition d'après un manuscrit du XVII^e siècle et avec les notes du P. Adry, par A. Gazier, (Extrait de la *Revue internationale de l'Enseignement* des 15 juillet et 15 août 1886), Paris, Armand Colin et Cie, éditeurs, 1886, p. 15.

⁵² アントワヌ・アルノーは例外的にウェルギリウスとホラティウスの作品の全部を読むことを推奨している。

⁵³ F. Delforge, *op. cit.*, p. 302. アントワヌ・アルノーの『人文学課程における学習規則の覚書』の執筆期は、1658年から遅くとも1660年という説と、アドリー神父が主張する1668年説がある。1658年から1660年に執筆したと仮定するなら、ニコルとランスロの『風刺詩選集』はアルノーの考えに直接応える形でこのような形式の教材を編纂したと考えることができる。

たラテン語を学習させたいという考えに応える形で、ピエール・ニコルとクロード・ランスロは1659年『風刺詩選集』を編纂、トマ・ギヨが10年後にフランス語との対訳版を編集しなおした。

1. 「教育的台詞」あるいは「教訓」について

フランス語で« sentence », « épigramme », « adage », « proverbe », 日本語では、「格言」「警句」「金言」「諺」とは、処世術、人生論、教訓、慣習や古くから言い習わされている言葉である。弁論術におけるこれら格言、たとえ話、寓話の重要性はアリストテレスの『弁論術』にも遡る。『名言集アダギア』*Adages*の中でエラスムスは金言について4世紀の文法学者ドナトゥスの言葉を引用して「事実や様々な状況下に適合した諺⁵⁴」と定義している。そして、ラテン語、ラテン文学の学習において「精神修養と、ラテン語の会話を習得する最適の師はテレンティウスであり、プラウトゥスが次に続く」とウェルギリウス、ホラティウス、キケロより上に評価し⁵⁵、自身の『アダギア』の中でも数多く引用している⁵⁶。4051ある格言の最初は「友人は互いにすべてを分かち」*Entre amis, tout est commun*というエウリピデスの『オレストス』からの言葉に始まるが、テレンティウスも『兄弟』の中でミキオの言葉として用いている⁵⁷。

旧約聖書の中の『箴言』、新訳聖書の中にたとえ話が多いことからわかるように、格言や諺は、相手を説得する際に引き合いに出される弁論術で使われる、話者と聞き手共通の概念である。格言、諺の知識を得ることはレトリック習得のために重要なことである。エラスムスの『アダギア』はマウントジョイ伯の依頼を受けて集めた選集であったが、次第にもっと多くの格言を、寓話的なもの、難解なもの、神学的なものなども含めたものを作りたいというエラスムスの願望から増えていき、

反対に1668年説をとるなら、トマ・ギヨがアルノーの考えの実践として、以前編集されたラテン語の『風刺詩選集』をフランス語訳との対訳版として改訂版を作ったと捉えることができる。

⁵⁴ Erasme de Rotterdam, *Les Adages*, sous la dir. de Pierre Saladin, t. 1, p. 26, *Les Belles Lettres*, (2011), 2013.

⁵⁵ G. Codina Mir. S. J, *Aux Sources de la pédagogie des jésuites le « Modus Parisiensis »*, Roma, Institutum historicum S. I., 1968, p. 95.

⁵⁶ エラスムスはプラウトゥスからは498、テレンティウスからは280引用している。Erasme de Rotterdam, *op. cit.*, 5 vol., 2011, rééd. 2013. その中で二つの『風刺詩選集』にも選ばれている引用はプラウトゥス17、テレンティウス33である。

⁵⁷ 1669年版『風刺詩選集』にも載っている。

1500年の最初の版では820であった格言集は、1535年の最終版では4051の格言を所収する膨大な金言集となった。1559年のトレントの公会議で第一級の禁書とされるが、彼の生前中、すでに30版以上を数えた『アダギア』はフランス国立図書館が所収する版だけでも、1518年版のものから1670年まで28種類ある。17世紀のフランスにおいても読まれていたことは想像に難くない。そしてフランス国立図書館所蔵のキケロやデモステネスの格言集の中にテレンティウスの名がタイトルに含まれているものも少なくとも4版ある⁵⁸。

ドービニャック師は、演劇の台詞の中で使われる教育的教訓を盛り込んだ格言について、また、芝居の中でどのように使われているか考察している。

「教育的な台詞」あるいは「教訓」とは、共通する心理を抱合し、その応用と結果だけが劇行為に適用される格言あるいは一般的な命題を指し、そこには観客に公共生活の規則を教えるのに適切な言葉だけが見いだされるのであって、しかじかの劇の葛藤が述べられているのではない。⁵⁹

と定義する。そして「すべての教訓調の台詞は冷たく退屈」であるから、台詞の中で言われても舞台は成功しないばかりか、劇行為が感動的でなくなる恐れがあると、その使い方には注意が必要であることを説く。けれども教訓はその特徴から、台詞を発する登場人物も限られ、「学者とか王子の師傳、王女の守役のように (...) 存在するだけで気に入られない」場合が多い。そして「演劇は公共の教育の場であり、劇作家は観客を愉しませるとともに教える意図を持つ」ものであるから、演劇に教訓を入れることは理にかなっていると⁶⁰。

演劇は人間の行為の模倣であるから、それを教示するためにこそ模倣する。まさに演劇の直接なすべきことである。しかし、風紀、すなわち我々に善を愛し悪を憎ませる道德生活の行いに関する規則については、これは間接に諸行為を

⁵⁸ *Flores, seu Formulae loquendi ex P. Terentii Comoediis excerptae*, Parisiis, 1557 ; *Fragments de Térence dans La Pornographie Terenciane*. Lyon, 1558 ; *Les sentences illustres de M. T. Cicéron et les Apophtegmes*, Toulouse, 1587, 1619, etc.

⁵⁹ オービニャック師『演劇作法』、戸張智雄訳、中央大学学術図書(49)、1997、p. 225.

⁶⁰ *Ibid.*, p. 248.

介入させて教えなければならない。⁶¹

そして、筋がよく説明され、そのなかで教訓を与えるのは作者の手腕によるとする。また、正しい格言が正しい人から発せられるのではなく、例えば「観客が正体を知っている詐欺師や悪人」の言葉として発せられるとき、「その台詞は教訓的な言葉を持つにもかかわらず、本人にふさわしい形をとり、面白い劇の遊びとなる⁶²」。そしてそれは誠実で善人が言うこと以上の効果を持って観客の心をとらえるのである。つまり、喜劇において教訓的な台詞は生きてくるとするのである。この意味において、プラウトゥスとテレンティウスの作品で発せられた教訓的台詞は、登場人物の台詞であることから離れたとき「格言」となる。

2. 『風刺詩選集』(1659)と『新旧作家の倫理と風刺の詩選集』(1669)

ピエール・ニコルとランスロはラテン語のみの『風刺詩選集』*Epigrammatum delectus ex omnibus tum veteribus tum recentioribus poetis*を編纂した。そこには多くの古典作家の作品からとられたものがあつた。そして、学校で学習および読むことを禁じられている作家の言葉も含まれていた⁶³。1669年トマ・ギヨは『新旧作家の倫理と風刺の詩選集』(以下、『風刺詩選集』とする)*Fleurs morales et épigrammatiques tant des anciens que des nouveaux Auteurs*の題のもとに編纂しなおしてフランス語との対訳版とした。サント・ブーヴはトマ・ギヨによる『風刺詩選集』はラテン語の『風刺詩選集』の抜粋であり、そのフランス語訳であるとしている。しかし、実際は単なる先行選集の対訳版ではなかつた。トマ・ギヨの『風刺詩選集』はニコルとランスロの選集をもとにかなり変更を加え、編集し直した異なる選集である。プラウトゥスとテレンティウスの選ばれた格言とその数も違う。このトマ・ギヨの『風刺詩選集』には皇太子に宛てられた序文が付されているが、「他者を統治する前に、自信を自制すること」を学んでもらうことを目標に作られたと書かれている。

1669年の『風刺詩選集』は、「ル・メルシエ氏の本から抜粋した人生の務めに関

⁶¹ *Ibid.*, p. 248-249.

⁶² *Ibid.*, p. 251.

⁶³ Cette édition était publiée, pour une fois, entièrement en latin et sans traduction.

するマキシム]、「古典から現代の著者による様々な風刺詩選集」、「ラベリウス⁶⁴、シリウス⁶⁵、その他古典作家の短長脚詩の格言」の3つの章から成り立っており、プラウトゥスとテレンティウスの格言はこの最後の章の終わりに載せられている。その数は、1659年版ではプラウトゥスが35、テレンティウスが59なのに対して1669年版ではそれぞれ148（うち1659年と共通している格言は25）、104（うち共通の格言は47）とほぼ倍の格言が収録されている。順序も先行選集とは異なるものもある。どの作品の何幕、何場、誰の台詞であるかの明記は一切ない。そしてドービニャック師が言及していたようにそれら格言からは元が喜劇であるということ想定させる箇所はほとんどない。格言的な台詞を言っている登場人物を見ても、実にその幅は広い。プラウトゥスの喜劇のストーリーの多くは、商売女に恋した青年が、その恋を实らせるために置屋の主人や父親、あるいは恋敵に、奴隷や召使い、時には隣人など助っ人の手を借りてハッピーエンドに終わる。そこには青年に人生の厳しさ、生きざまを教え諭す人生の先輩としての大人がいる。彼らはいろいろな場面においてそれぞれが人生を語りながら若者にエールを送る。したがって、話の核となる恋人の男女の台詞は、恋に関するものがほとんどで、あまり格言らしき言葉を発することはない⁶⁶。奴隷や召使いは時に処世術、時に時代を象徴するかのような諦観した言葉を発する⁶⁷。人生の先輩としての、恋人たちを取り囲む大人たち

⁶⁴ ホラティウスの風刺詩1・10にも挙げられ、ユリウス・カエサルの要請に応じて作品を作るなどしたパントマイムの作家である。

⁶⁵ 数々の格言を残しているローマの詩人である。

⁶⁶ 以下、プラウトゥス、テレンティウスの引用は『古代ローマ喜劇全集』全5巻、東京大学出版会、1975-1979訳を使用。『風刺詩選集』のラテン語が原典を変更させた場合、意識のフランス語訳に関しては拙訳を含めた。

例：「どうしたらいいかはちゃんとわかっていたが、残念ながら、そのことを実行できずにしたわけさ。恋の力に負け、暇にまかせて、でたらめやっていたんだ。」（『三文銭』III-2、レスボニクス、v. 657-658）；「惚れている男の情けないざまよ。」（『アスィナリア』III-3、レオニダ、v. 616）

⁶⁷ 例：「ともかく召使いは忠実であるということを得なければなりません。（…）」（『アンフィトルオ』III-3、ソスィア、v. 959-961）；「不幸にあったら元気を出せ。」（『捕虜』II-1、監視の奴隷、v. 202）

の人生論や道徳が一番多く取り上げられている⁶⁸。時には女について⁶⁹、金についての格言⁷⁰もある。また、1659年にあり、10年後に削除されたものの多くは、誤解を受けそうなもの⁷¹、あるいは人生に諦観しているネガティブな見方をしているもの⁷²である。

テレンティウスからの格言は二つの版とも選んでいる箇所はほとんど同じである。1669年版には1659年版では全く引用されなかった『ポルミオ』と、ほとんど引用されなかった『義母』を含めたすべての戯曲から引用している。やはり恋を問題にした格言⁷³、人としての生き様や人生論、教訓⁷⁴がある。しかし、5行から10行引用するなど長いものも少なくない。それらは主に『アンドロスの女』のパンフィリスの父スイモー、『兄弟』のそれぞれ子供の育て方で意見し合うミキオとデメア兄弟、『ポルミオ』のクレメースの父デメアと、恋する青年の父親である。それら

⁶⁸ 例：「人間はすべて願い事をする時だけは善人だが、願いが叶ったその時には悪者になり、嘘つきになるというのが一般です。」(『捕虜』II-1、テュンダルス、v. 231-233)；「友達のいないところでその悪口をいうのはいけないよ。」(『三文銭』IV-2、カルデミス、v. 926)；「正直な男というのは、どれほどにまともであっても、正直でも、まだ足りないと思っているような男をいうんだよ。」(『三文銭』II-2、フィルト、v. 320)；「自分で自分に満足しているようなのは正直でも、まともでもない奴らだ。」(同、v. 321)

⁶⁹ 例：「心の優しい娘さんでありさえすれば、それだけで充分持参と言えましょう。」(『黄金の壺』II-2、メガドーロス、v. 239)；「遊女ってものは棘だらけのいばらの藪よ。だれかれを問わず、一度触ったらすぐ怪我したり、ひどい目にあったりするのさ。」(『トルクレントゥス』II-1、アスタタフィウム、v. 226-227)；「嫌がる女を妻にした女は、妻じゃなくて、夫の敵よ。」(『スティクス』I-2、パンフィリア、v. 140)

⁷⁰ 例：「儲けを稼ぎ出すためにやまず餌まきが必要だ。」(『アスィナリア』I-1、デマエネートゥス、v. 215)；「祭りさわぎにおごったら、普段は節約しなければ貧乏するのは当然だ。」(『黄金の壺』II-8、エウクリオ、v. 380)

⁷¹ 例：「運命は人の命を、好き勝手につくり、さいなむばかりです。」(『捕虜』II-2、テュンダルス、v. 304)

⁷² 例：「この世の暮らしの楽しみも、その苦しみに比べたら、取るに足りないものようね。」(『アンフィトルオ』II-2、アルクメーナ、v. 633)

⁷³ 例：「恋する同士の仲違いは、愛を全きものにする。」(『アンドロスの女』III-3、クレメース、v.555)

⁷⁴ 例：「道従は友を作るが真実は敵を作る。」(『アンドロスの女』I-1、ソシア、v.68)；「人は快樂にたやすく身を委ねる。」(『アンドロスの女』I-1、スイモー、v.77-78)；「友人は互いにすべてを分かつ。」(『兄弟』V-3、ミキオ、v. 804)；「知恵者にはひとこと言えば十分だよ。」(『ポルミオ』III-3、アンティボ、v. 541)；「時がたてば苦しいことも忘れる。」(『自虐者』III-1、メネデームス、v.422)；「フォルテユナの女神よ、あなたの幸福はけっして長くは続かない。」(『義母』III-3、パンフィリス、v. 406)；「あまりに自由なことをすればみな墮落してしまう。」(『自虐者』III-1、クレメース、v.483)；「人間はみな自分のこと以上に他人の事となるとよく目がきいたり、見分けがつかうようにできている者らしい。」(『自虐者』III-1、メネデームス、v.503-506)

は親の務め、子供の務め、人生をよりよく生きるための考え方をとうとうと語っている台詞である。

プラウトゥスの引用がほとんど1、2行であることと比較すると、テレンティウスの引用は非常に長い。それはプラウトゥスとテレンティウスの作風の違いであり、二人の評価が、上演される作品としてと、テキストとしての文学的側面において、常に相反する評価を得ていることを物語っている。

3. そしてプラウトゥスとテレンティウスは残った

プラウトゥスとテレンティウスの特徴についてドービニャック師は次のように言っている。

プラウトゥスよりテレンティウスの方が読んで楽しいのは、台詞がより優雅であるからである。ところがプラウトゥスのほうが舞台で成功するのは、動きが多いからである。前者には多くの深刻な対話があるが、笑いを求めに来る観客が喜劇に期待しているものではない。後者は常に登場人物の質に適応する葛藤があり、そこから多くの滑稽味が生まれるが、それこそ望まれているものである。⁷⁵

演劇にはライヴ・パフォーマンスとしてのスペクタクルの面白さの他にテキストとして文学的側面があることは述べた。彼らの作品は、古代の劇作家の中で最も多くの戯曲が残っているにもかかわらず、教養として「読まれる」ことはあっても、上演される機会はきわめて少なかった⁷⁶。

彼ら〔プラウトゥスとテレンティウス〕が書いた喜劇は、演劇コンクールやさまざまな祝宴の際に上演されることを目的として創られたのだが、(略) テレンティウスの作品は、文学的要素が評価されるようになり、作品が上演されることより読み物として、また研究対象として認識されるようになった。紀元前一世紀、ローマ帝国時代、テレンティウスの喜劇はすでに子供たちの学習課題

⁷⁵ オービニャック師、前掲書、pp. 226-227.

⁷⁶ 拙論、「第七章 十七世紀フランス喜劇と古典ラテン喜劇」『混沌と秩序—フランス十七世紀の諸相—』、中央大学人文科学研究所編共著、中央大学人文科学研究所研究叢書 60 号、2013, p.220.

として用いられていた。キケロも好んで彼の文からの引用を好み、ホラティウスも彼の考えや表現を良しとしていたのである。ユリウス・カエサルもまたテレンティウスの静の中で穏やかな文体をメナンドロスから受け継いだものとして「半分のメナンドロス」と呼び称賛していた。これらのことから本来舞台の上で上演されるはずの戯曲が、真面目な哲学的喜劇というイメージとともに名言集の中に扱われることとなった。さらにテレンティウスの作品の注解・考察を付した全集を編纂した四世紀の文法学者ドナトゥスは、テレンティウスの哲学を、詩人たちの空想が時として風俗の有害となりうることを示したものであると解釈し、その認識が後世へ続いた。こうして、テレンティウスの喜劇は、単に上演されるだけでなく、読まれる価値のあるものとして、テキストに焦点が当てられることになった。特にヨーロッパにおいてこの認識が強く残り、その結果、(略) 演劇の脚本でありながら、ますますテキストが、役者によって体現化される生きた演劇文化から切り離され、本来の意味が理解されなくなってしまった。⁷⁷

これはポール＝ロワイヤル編集の二つの『風刺詩選集』において引用されている長いテレンティウスの教育的台詞が、道徳論、教訓譚として学校教育の中で、哲学的、道徳的教材となりうることを示している。一方で、喜劇の本質が、ホラティウスの言うとおりに、「楽しませ、教育する」⁷⁸であることを想起させる。そして喜劇とは「人生の手引きであり、模倣、風俗の鏡、真実の絵姿を教え諭す詩であり話」である⁷⁹。つまり、「社会の鏡を舞台上に写し出し、観客を楽しませ、教育すること」が喜劇の原則であるが、まさにプラウトゥスとテレンティウスの作品から抽出されたものは、道徳に基づいた人生訓である。

『風刺詩選集』に選択された格言の多くは現代にまでよく知られる表現も少なく

⁷⁷ *Ibid.*, p.219-220.

⁷⁸ ホラティウスは詩(=演劇)の役割を次のように言及する「詩人は教訓を与えるか、楽しませるかしたいと望むものだ。時には、人のためになり、同時に楽しませようとする。教え諭すなら、短く説教すべきである。簡潔に述べた言葉なら、人の心はおとなしく受け入れ、忠実に教えを守る。」ホラティウス『詩論』v. 333-336 参照。

⁷⁹ 喜劇が「人生の鏡である」という考えは、キケロの言葉をドナトゥスが「テレンティウスの人生 *la vie de Térence*」の中で引用したことに端を発するが、シャルル・エティエンヌがテレンティウスの『アンドロスの女』を翻訳した「訳者の言葉」*Epître du traducteur*の中でフランス語に訳した。この文は、ジャック・グレヴァン、ロンサール、その後のテレンティウス全集に、そのまま引き継がれ使われることになる。

ない。プラウトゥスとテレンティウスの喜劇が、喜劇の役割を果たし、喜劇の本質を体現化していることの表れであろう。そしてドービニャック師がいう作者の手腕が見事に表れていることは、ポール＝ロワイヤルにおいてプラウトゥスの作品があまり訳されていないのに対して、格言集の中においては、テレンティウスの倍紹介されていることによって明らかである。

結論

人文学課程における『学習の規則の覚書』にある5年目の生徒のプログラムには、午後、30分『風刺詩選集』を学んだ後テレンティウスを1時間読んでいたことが記されている⁸⁰。

ニコルは、パスカルの『プロヴァンシアル』*Les Provinciales*のラテン語訳を1658年、ケルンで出版するとき、「[テレンティウスの]文体の繊細さに自分の文体を近づけるため(略)何度も読み返した」ほど、テレンティウスを高く評価していたという⁸¹。ポール＝ロワイヤルの教師たちの一連の行動には、一般に定着されている評価がどのようなものであれ、子供たちが、フランス語をしっかりと学び、善悪の判断をつけるために知識を得、物事を自ら考え行動できるように教養を身に着けることを可能にするため最良の方法を考える教師たちの信念が見られる。そこに、サン・シランから続くポール＝ロワイヤルの教育理念が「小さい学校」の礎となっていることを見る。

そして、演劇に反対の立場をとっているポール＝ロワイヤルの教育機関において古典ラテン喜劇が読まれていたという逆説的な状況だからこそ、プラウトゥスとテレンティウスが、単に「喜劇の父」というだけではなく、多くの人生訓を読者に提供してくれる日常会話としての「生きたラテン語の師」であることが顕示されたと言えるだろう。

⁸⁰ Antoine Arnauld, *op. cit.*, p. 15.

⁸¹ Sainte Beuve, *op. cit.*, tome I, p. 1084.